

## 夫婦の愛情表現行動と夫婦関係満足度との関連性

中 島 英 貴

### I. 問題と目的

結婚が個人の人生にとって重要なイベントであることを考えると、それによって結ばれる夫婦関係がその個人の心理・行動に及ぼす影響は大きいと考えられる。実際に、良好で満足いく結婚生活を送れているかどうかは既婚者の幸福感や生活感情に重要な影響を及ぼしているということや、既婚者の心理的適応や精神的健康の維持・増進を考えていく上でも良好な結婚生活が不可欠であることが多くの先行研究から明らかにされている。このようなことから、夫婦関係の良好さを規定している要因について研究を積み重ねることは有意義であると考えられる。

本研究では夫婦関係の良好さを示す指標として、夫婦関係全般に対する主観的な満足感を表す夫婦関係満足度 (marital satisfaction) をとりあげた。夫婦関係満足度については、それを規定する要因として、これまで夫と妻の年齢、収入といった人口動態的な指標や、夫婦間で交わされるコミュニケーション、夫婦の性役割分業や性役割態度の一致・不一致といったものが検討されてきた。本研究では、夫婦関係満足度を規定する要因として夫婦の愛情に焦点を当てて検討を行った。

夫婦の愛情に焦点を当てる理由として以下の2つが挙げられる。①家族の個人化や家族機能の変化によって、夫婦の情緒的・心理的側面がこれまで以上に重視されるようになり、夫婦間の愛情が問われるようになってきたこと、②これまで行われてきた夫婦に関する研究には偏りがあった。特殊で否定的な状況における夫婦の行動ばかりが対象にされ、夫婦行動の日常的、肯定的側面が重視されてこなかったこと (愛情は日常的、肯定的なものと考えられる)。

そしてさらに本研究では、夫婦の愛情は夫と妻それぞれが具体的な行動によって表現されて初めて夫婦関係満足度に結びつくという立場に立ち、その具体的な行動を「愛情表現行動」という概念で捉え、その行動と夫婦の愛情や夫婦関係満足度との関連を検討した。愛情表現行動については「夫婦がそれぞれ相手に対して持っている愛情を、相手に伝えるまたは表現するために日常的に行っている行動」と定義した。

### II. 方法

#### 1. 調査方法と実施の時期および調査対象者

質問紙調査を実施した。調査は2003年9月から2003年12月の間に行った。対象者は結婚をしている男女138名 (男性67名, 女性71名)。男性の平均年齢は41.7歳 (SD: 11.42), 女性の平均年齢は39.2歳 (SD: 9.83) であった。また男性の結婚年数の平均は13.9年 (SD: 11.41), 女性の結婚年数の平均は14.3年 (SD: 11.15) であった。

#### 2. 質問紙の構成

年齢、結婚年数、性別、学歴、就業形態、子どもの有無について回答を求めたフェイスシートと以下の6つの尺度から構成した。(4)以外の尺度はすべて5件法で回答を求めた。(1)愛情表現行動尺度 (21項目): 夫婦間で行われる愛情表現行動の頻度を測定することを目的に、松井 (1990) の恋愛行動尺度の項目や、久田ら (1989)、福岡 (2000) のソーシャルサポート尺度の項目を参考に筆者が作成した。(2) Marital Love Scale (19項目): 夫婦がお互いに相手に対して持っている愛情の程度を測定することを目的に菅原ら (1997) が作成した尺度。(3) 犠牲の意志尺度 (4項目): Van Lange et al. (1997) が、重要な他者との関係維持のために、自己の利益をどの程度犠牲にできるかを測定することを目的に作成した尺度。回答者に夫 (妻) に関係する活動以外で、回答者にとって重要な活動を4つ挙げるよう求め、それらの活動と夫 (妻) に関係する活動の両立が困難な状況を回答者に想像させ、そのときに回答者が、夫 (妻) に関係する活動のためにそれらの活動をそれぞれどの程度犠牲にできるかについて回答を求めた。(4) 関係の調整尺度 (8項目): Rusbult et al. (1991) が作成した尺度。重要な関係を結んでいる相手 (夫または妻) が、その関係にとって破壊的な行動をとった際、回答者がどのように対応するのかを自由記述式で回答してもらい、その回答内容から個人の持つ関係の調整の程度を測定する。(5) 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (15項目): 個人の持つ性役割態度がどの程度平等主義的であるかを測定するために鈴木 (1994) が作成した尺度。(6) 夫婦関係満足度尺度 (6項目): Norton (1983) が夫婦の関係の良さ (goodness of the relationship) を測定することを目的に作成した QMI (Quality Marriage Index) を諸井 (1996) が翻訳したもの。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 尺度構成

(1) 愛情表現行動尺度：因子分析を行って、夫（妻）への情緒的な配慮や夫（妻）をケアする行動を示す項目で構成される第1因子（12項目）と夫（妻）への恋愛感情に基づいた行動を示す項目で構成される第2因子（7項目）を抽出した。前者を「情緒的ケア行動」、後者を「恋愛行動」として下位尺度を構成した（信頼性係数の推定値はそれぞれ $\alpha = .92$ 以上、 $\alpha = .84$ 以上）。(2) 犠牲の意志尺度と関係の調整尺度：前者について本研究では、項目の合計点を項目数で割った平均を尺度得点とした。後者については、先行研究を参考に、回答者の回答を相手との関係維持にとって「建設的な反応：+1点」「破壊的な反応：-1点」「分類不能：0点」という基準で分類・評定を行い、8項目の合計点を尺度得点とした。(3) Marital Love Scale, 平等主義的性役割態度スケール短縮版, 夫婦関係満足度尺度：これらについては、信頼性係数の推定値はそれぞれ $\alpha = .95$ 以上、 $\alpha = .89$ 以上、 $\alpha = .94$ 以上と十分に高い値を示したため、先行研究で得られた構成をそのまま採用した。

#### 2. 各尺度得点の男女比較と結婚年数における比較

(1) 男女比較：t検定を行ったところ、Marital Love得点と平等主義的性役割態度得点においてのみ有意差が見られた。(2) 結婚年数における比較：結婚年数が15年未満の群（72名）と15年以上の群（66名）の2群に分けてt検定を行ったところ、情緒的ケア行動得点、恋愛行動得点、Marital Love得点、関係の調整得点において有意差が見られた。

#### 3. 各尺度間の関連

各尺度間の相関係数と偏相関係数を算出し、各尺度間の関連を検討した。

#### 4. 愛情表現行動が夫婦関係満足度に与える影響

情緒的ケア行動得点と恋愛行動得点それぞれの平均値の高低から、情緒的ケア行動 High-恋愛行動 High 群（HH 群）、情緒的ケア行動 High-恋愛行動 Low 群（HL 群）、以下同様に LH 群、LL 群の計4群を構成した。そして夫婦関係満足度得点を従属変数として一元配置の分散分析を行ったところ群間に有意な差が認められ、さらに Tukey の多重比較を行ったところ、LL 群が HL 群、HH 群よりも有意に低いという結果が得られた。

### Ⅳ. 考察

#### 1. 夫婦の愛情表現行動

夫婦の愛情表現行動について、相手への情緒的な配慮

を示す行動である「情緒的ケア行動」と、相手への恋愛感情を相手に直接的に表現する「恋愛行動」という2つの側面から検討した。男女間で差が見られなかったことから、これらの行動については男性も女性も同程度行っていると考えられる。また結婚年数15年未満の者と15年以上の者との比較では、情緒的ケア行動、恋愛行動それぞれにおいて有意差が見られ、どちらの行動とも結婚後15年未満の男女の方が15年以上の男女よりも多く行っていた。このことから、愛情表現行動は結婚年数が増えるにしたがって減少することが推測される。

#### 2. 夫婦の愛情表現行動と夫婦関係満足度、夫婦の愛情との関連

愛情表現行動と夫婦関係満足度との関係について、情緒的ケア行動、恋愛行動ともに多く行っている者と、恋愛行動が少なくても情緒的ケア行動を多く行っている者は、情緒的ケア行動、恋愛行動ともに少ない者よりも夫婦関係満足度が高いという結果が得られた。この結果は、愛情表現行動と夫婦関係満足度とが関連しており、そのなかでもとくに情緒的ケア行動が重要であることを示すものといえる。

愛情表現行動と夫婦の愛情との関係について、情緒的ケア行動、恋愛行動ともに夫婦の愛情との間の偏相関係数が正であったことから、夫婦が相手に対して持っている愛情の度合いが強い者ほど、情緒的ケア行動、恋愛行動といった愛情表現行動を相手に多く行っていると考えられる。また、夫婦の愛情と夫婦関係満足度との間に強い正の相関が見られたことから、愛情が夫婦の満足度を規定する要因として重要であると考えられる。

#### 3. 今後の課題

今後の課題として、データの収集方法が挙げられる。本研究では夫と妻のデータを別々に収集して分析を行っているが、この場合、夫と妻の個人内のプロセスは扱えても、夫婦の間に生じるプロセスを扱うことができない。夫婦関係における愛情表現行動の有効性や夫婦間の認知のズレといった問題を検討するためには、夫婦のペアデータを収集する必要がある。

また本研究では夫婦間の比較的ミクロな要因についてだけ検討を行ったが、先行研究では家庭の経済状況、夫婦の就労状況、子どもの有無といったその他の環境要因も夫婦関係に大きな影響を及ぼしていることが明らかにされている。よって今後は愛情表現行動とそのような要因を複合的に視野に入れながら、夫婦関係満足度が規定されるメカニズムを明らかにしていく必要がある。